

しょうがいしゃとわたし

一宮市立丹陽西小学校三年

小林 れい

わたしには、しょうがいしゃのいもうとがいます。いもうとは、四才です。わたしは、いもうとがしょうがいしゃだということがわかった時、「しょうがいってなんだ。」

と思いました。お母さんに聞いてみたら、

「ふつうの子よりせい長する速さが、おくらしている子のことだよ。」

と教えてくれました。でも、わたしは、

「ふつうの子みたいだな。」

と思っていました。

でも、今では、ふつうの子は、ふつうに立てるけど、いもうとは、ささてあげないと立てません。そこで、母子通園という、しょうがいしゃの学校に入りました。そこには、やさしい先生や、楽しそうなしょうがいしゃの子がいて、わたしはそんな人たちを、「きょうだいで遊ぼう」という行事ではじめて見ました。そこにいた子は、いもうとと同じしょうがいではありませんでした。そこにいてかんだことは、

「いろいろなしょうがいしゃがいる。」

ということです。

「きょうだいで遊ぼう」では、さいしょにみんなで、歌を歌ったり、手遊びをしたりしました。つぎに、みんなでフラフープをくぐりました。さいごに、かんそうをみんなで言い合いました。わたしは、そういうしょうがいしゃのための学校があるということは、すごいなと思いました。

そのとき、いもうとは、家とはちがうかんで、すごく楽しそうでした。そして、一つ上の人たちは、母子通園をそつぎょうしました。一つ上の人たちの一人が代表で文集を読みました。そのとき、わたしが心にこった言葉は、

「このよには、しょうがいをもつ人と、しょうがいをもつかもしれない人しかいない。」

という言葉です。どうしてこの言葉が、心にこったかというと、わたしのおおじいちゃんを思い出したからです。わたしのおおじいちゃんは、十年間ねたきりで、九十一才で天国にいつてしまいました。おおじいちゃんは、ふつうに生まれたけれど、年をとって歩けなくなってしまうました。だから、おおじいちゃんみたいに、ふつうにそだったからといって、しょうがいしゃにならないわけではないので、どんなしょうがいをもった人も、大切にしていきたいです。

